

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350727

研究課題名(和文) 実践を基盤にした体育教師のカリキュラム開発能力の形成

研究課題名(英文) Formation of School based Curriculum Development Capability of Physical Education Teacher

研究代表者

丸山 真司 (MARUYAMA, Shinji)

愛知県立大学・教育福祉学部・教授

研究者番号：10157414

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、体育教師が学校でカリキュラム開発をする際に必要不可欠なカリキュラム開発能力の内実・構造を理論的・実践的に解明すると同時に、体育教師のカリキュラム開発能力の形成プロセスを明らかにし、最終的には体育教師のカリキュラム開発能力育成プログラムを開発することである。主な研究成果として、体育カリキュラム開発に向かう体育教師の意識変化の要因、体育教師のカリキュラム開発能力の内実、体育教師のカリキュラム開発能力の形成プロセスの特徴が明らかにされた。しかしながら、体育教師のカリキュラム開発能力育成プログラムを創出するまでには至らなかった。今後の研究課題としたい。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to analyse the structure of curriculum development ability of physical education teacher in practicing way theoretically and also to make clear the formation process of the curriculum development ability. As a result of this study, (a) factor of a conscious change in physical education teacher to the curriculum development, (b) the component and structure of the curriculum development ability, and (c) the feature of the formation process of curriculum development ability of physical education teacher were elucidated. However creation of curriculum development ability promotion program of physical education teacher was left as future's research task.

研究分野：スポーツ教育学

 キーワード：体育カリキュラム カリキュラム開発能力 スクール・ベーストカリキュラム開発 体育実践 ライフ  
 ヒストリー

## 1. 研究開始当初の背景

本研究の学術的背景として大きく以下の3つの点が挙げられる。

第1に、教師のカリキュラム開発意識の低下問題と学習指導要領改訂・実施状況である。日本では1958年の学習指導要領改訂を機にカリキュラム研究が停滞し、それと連動して教師のカリキュラム開発意識が低下したと多くの教育学者(安彦忠彦,天野正輝,長尾彰夫,佐藤学,柴田義松,田中耕治ら)は指摘する。佐藤学や田中耕治によれば、教師による教材や教科内容研究、授業研究と結びついたカリキュラム研究やその中で教師の力量形成研究が今日的な重要課題になっている。同時に、近年の学習指導要領改訂においては「各学校の特色ある学校づくり」(1998,文科省)に関わって学校固有のカリキュラム開発やマネジメントが謳われている。

第2に、カリキュラム研究の国際動向とスクール・ベースト・カリキュラム開発(School Based Curriculum Development, 以下SBCD)の重視という状況である。カリキュラム研究の国際動向においてSBCDというカリキュラム開発のパラダイム転換は、カリキュラム開発への教師参加を中心にその開発過程および構成要素間の相互作用によるダイナミズムを解明する道を開き、今後の学校教育における質保障を目指す切り札になるとされている(有本昌弘,2007)。したがって、それぞれの地域や学校に応じた実践的な体育カリキュラムの創造とそれを推進する体育教師のカリキュラム開発能力の育成が焦眉の課題となる。

第3に、体育教師教育研究の動向が挙げられる。木原誠一郎(2011)は、日本の授業研究という教師文化の伝統の中で体育教師のリアルな力量形成過程と支援体制を解明することが今日の体育教師教育研究の重要課題になると指摘している。

さらに、本研究の背景としてはこれまでの

筆者のカリキュラム開発研究との関係が挙げられる。筆者はこれまで運動文化論やSBCDのアプローチから実践を基盤にした体育カリキュラム開発方法の理論的・実践的課題を明らかにしてきた(平成20~22年度科研基盤研究(C),課題番号20500525、平成23~25年度科研基盤研究(C),課題番号23500699)。これらの一連の研究成果や課題が本研究着手の前提となっている。

## 2. 研究の目的

上述したような学術的背景と問題意識をもって本研究は、体育教師が学校でカリキュラム開発をする際に必要不可欠な専門的能力(カリキュラム開発能力)の構造を理論的・実践的に解明すると同時に、体育教師のカリキュラム開発能力の形成プロセスを明らかにし、最終的には体育教師のカリキュラム開発能力育成プログラムを開発することを目的とした。

## 3. 研究の方法

本研究ではSBCD研究方法論を基礎に、事例研究法、質的研究法、教師のライフヒストリー研究法を組み合わせ、.体育教師のカリキュラム開発能力構造の理論的・実践的解明、.カリキュラム開発能力形成プロセスの解明、.カリキュラム開発能力育成プログラムの開発という3つの研究課題領域とそれに対応する個別課題を相互に関連づけながら研究を組み立てた。研究課題領域では主に「授業実践-単元計画-年間計画」づくりの視点からそこで必要とされる能力について理論的・実践的解明を試みた。研究課題領域では、事例研究と体育教師のライフストーリーアプローチによって、体育教師のカリキュラム開発能力形成の特徴やカリキュラム開発能力形成に必要な方法・条件の解明を試みた。研究領域では、研究を総合してカリキュラム開発育成プログラムを構築

する。

#### 4. 研究成果

本研究の3つの研究課題領域とそれに対応する個別研究課題を順次積み上げて総合し、研究をまとめようと計画した。研究課題領域

及び については研究成果が見られたものの、研究課題領域 におけるカリキュラム開発育成プログラムの構築という最終課題については達成できなかった。この点は今後の課題として残された。本研究における研究活動の成果は、雑誌論文8件、図書6件(その内単著1冊)、学会発表8件である。主な研究成果と課題は、以下のようにまとめられる。

##### (1) 授業づくりにカリキュラムづくりの視点を入れることによる体育教師の意識改革

安彦忠彦(2009)がカリキュラム評価の観点から授業研究を位置づけ、カリキュラムの改善につながる授業研究の必要性を指摘しているように、個々の授業実践を「単元 - 学年 - 階梯」という長い時間軸の中で捉え、教科のカリキュラム開発とつながる授業づくりが求められている。体育教師のカリキュラム開発能力の形成に関わって、本研究では授業づくりにカリキュラムづくりの視点を入れることによって以下のような教師の意識変革がもたせることが明らかにされた。第1に、教師がカリキュラムづくりという視点を持つことによって、各階梯あるいは学年の出口像や各階梯 - 学年 - 単元間の接続を意識し問題にするようになる。つまり教師はカリキュラムづくりの視点から、長期的な展望と学校教育全体の中で学年テーマと単元のねらいの設定、内容や教材選択、指導の問題を捉え、授業づくりにおいて施設・道具・予算・時間・人材・組織などのカリキュラムづくりに必要な条件を問い直す意識が芽生えるようになる。第2に、カリキュラムづくり

の視点を持つことは、「育ちそびれ」の回復と教科内容・教材の重点化を進めることになる。つまり各階梯・学年で教えた中身や育てたい力の“濃淡”を明確にし、それを具体的な単元や授業の目標・課題に反映させて構造化するようになる。第3に、カリキュラムづくりの視点を持つことによって授業実践と教科外活動(部活や学校行事)との関連を意識するようになる。第4に、カリキュラムづくりの視点を持つことによって学校づくりを意識するようになる。以上のような意識改革がカリキュラム開発能力形成に深く関わることが明らかにされた。

##### (2) 体育教師のカリキュラム開発能力の内実と構造の理論的・実践的解明

本研究の目的の一つは、「カリキュラムデザイン - カリキュラム実施・調整 - カリキュラム評価」という3つのカリキュラム開発の層が連動するダイナミックなシステムを明らかにし、これらの層で必要とされる能力の内実と相互連関を解明することであった。ここでの研究成果の第一は、教師が体育カリキュラム開発を展開する際のダイナミズムや方法原則を理論的・実践的に明らかにしたことである(『体育のカリキュラム開発方法論』, 創文企画, 2015に単著としてまとめた)。この方法原則の中に、体育教師のカリキュラム開発能力の内実と構造を描く理論的根拠を見いだした。その中でとりわけ体育カリキュラム開発の方法 = 参加型 SBCD サイクルモデルを提起した(2014, 日本体育学会, 図1)。

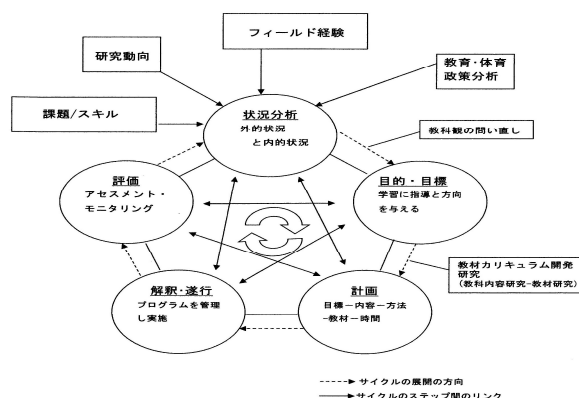


図1. SBCDにおける参加型カリキュラム開発サイクル(Taylor, 2000, 筆者改変)

このモデルに関わって、体育教師のカリキュラム開発能力として以下のような能力が必要であることが示された。子どもの実態把握能力、内外の状況分析と目指す体育像をつなぐ能力、子どもの生活課題・発達課題とスポーツ文化の学びを結ぶ過程をリアルに描き出す力、カリキュラム目標 各学年のテーマ 年間計画を創る能力、重点教材・重点内容を設定する能力、体育授業と教科外体育を結びつけて構想する力、教科内容と発達課題をつなぐ教材づくり力、カリキュラム実践を評価する力、同僚性を構築し協働する力である。

さらに、優れた体育実践を創造してきた教師の実践分析をした結果、体育教師のカリキュラム開発能力を支えるものを見出すことができた。それは、どの教師にも共通する実践の背景にある「こだわり」、具体的には「みんな」という思想へのこだわり、時代や社会の要請を受けとめながらも自分自身の実践課題を中心に据える意識、対話を重視すること、実践づくりを支える仲間との集団研究を重視することであった。

### (3) 体育教師のカリキュラム開発能力の形成プロセス

本研究では、優れたカリキュラム実践を展開している体育教師を抽出し、どのようにカリキュラム開発能力を形成してきたのか、その特徴や形成プロセスを教師のライフストーリー研究手法を用いて分析した。

ここではとりわけ熟練体育教師（小学校教諭A氏、教師歴37年）がこれまでの体育実践づくりの中でどのようなカリキュラム経験をし、その中でカリキュラム開発に向かう実践的知識をどのように変容・形成してきたのかについて、ライフストーリー・アプローチによって明らかにした。実践的知識の形成は、実践しつつ実践について学んでいくという教師としての力量形成のメルクマールで

あり、カリキュラム経験の内実でもあったとされ、これまでの実践の中で形成してきた実践的知識がどのようにカリキュラム開発に向かうかを問うことが実践的知識研究の論点になるとされている。

研究の結果、A氏の体育カリキュラム開発に向かう実践的知識の形成 変容プロセスは0期～ 期に区分（表1）され、それぞれ

表1. 体育教師（A氏）のカリキュラム開発に向かう実践テーマの変容

0期(1971-75)：学生時代の学び
I期(1976-79)：よい授業
II期(1980-82)：子どもたちの自主性・創造性を生かす
III期(1983-87)：子どもたちの学習意欲を引きだす教材づくり
IV期(1988-95)：学校づくり・教育課程づくりを視野に入れた授業
V期(1996-2007)：豊かな内容で、子どもたちをつなぐ体育の教材づくり・授業づくりからカリキュラムづくりへ
VI期(2008-2013)：V期の継承・発展

の期において実践的知識の形成 変容の要因・契機が存在した。0期は、学生時代の学び期として“そもそも論”の学びが実践的知識を支える、教師としての「信念」形成の土台をつくった時期である。初任教師時代(教師歴1~4年)のカリキュラム開発に向かう実践テーマや意識は、\*子どもの事実へのこだわり(子どもからの訴え)、\*「よい授業」づくり、おもしろい教材づくり研究(個人的研究)、\*技術指導の系統性研究でうまくする授業の追究、\*「不自由の自覚」の芽生え(やりたい実践ができない)であった。

中堅前期教師時代(教師歴5~12年)の実践テーマや意識は、\*子どもの自主性・創造性を活かす教材研究(集団的研究)、\*運動文化と子どもをつなぐ教材研究を中心とした実践研究、育てるべき運動文化の主人公像の意識化であった。中堅後期教師時代(教師歴13~20年)では、\*年間計画づくりの意識化と学校づくり、\*小学校体育の出口像を措定、\*「不自由の自覚」=職場・学校づくりの意識化が中心テーマとなり、学校づくりと結びつけた年間計画づくりの実践的知識の形成がカリキュラム開発に向かうポイントになることが明らかにされた。ベテラン

教師時代（教師歴 21 年以上）になると、\* 年間計画とカリキュラムを意識した実践研究、\* 発達課題と教科内容の探究から重点教材カリキュラム開発研究に実践研究のテーマがシフトしていくことが明らかになった。つまり、体育教師（A 氏）のカリキュラム開発に向かう実践的知識は、おもしろい教材づくり よい授業づくり 運動文化と子どもをつなぐ教材研究を中心とした ~ 期から、年間計画とカリキュラムを意識した実践研究及び教材カリキュラムの研究を展開した ~ 期に移っていったという特徴をもち、こうしたカリキュラム開発に向かう実践的知識を変容させつつ、優れた体育教師はカリキュラム開発能力を形成していくものと考えられる。

#### （４）今後の課題と展望

本研究では、体育カリキュラム開発に向かう体育教師の意識の変化、体育教師のカリキュラム開発能力の内実、体育教師のカリキュラム開発能力の形成プロセスの特徴が明らかにされた。これらの研究成果はとりわけ体育のカリキュラム研究において新しい研究視座と知見を提供するものである。しかしながら、本研究の目的の一つに挙げた教師による体育カリキュラム開発研究先進国である地域（ドイツ）とカリキュラム開発が困難な地域（震災被災地、ペルー等）における体育教師のライフストーリー比較研究は途上のままである。さらに、最終目的とした体育教師のカリキュラム開発能力育成プログラムを創出するまでには至らなかった。引き続き今後の研究課題としたい。

#### ５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

1) 丸山真司：「いまこそ、教師主体の体育カリキュラム開発に取り組もう - 岨和正氏の体育実践研究史から学ぶこと - 」, 体育

科教育, 第 66 巻第 3 号, 2018, 大修館書店, pp.33-37, 査読無

2) 丸山真司：「『アダプテッド・スポーツ』実践の試み 『ともに意味を問い直す』授業づくりを目指して」, たのしい体育・スポーツ, 第 37 巻第 1 号, 創文企画, 2018, pp.56-59, 査読無

3) Yoshihito Ito, Shinji Maruyama, Kuga Alexander: Examining the Configuration of Olympics-related Teaching Content: Focusing on Olympic Literacy, Beitragsband des 10. Deutch -Japanischen Symposium, Institut für Sportwissenschaft der WWU Münster in Kooperation mit dem Willibald Gebhardt Institut (WGI) ind Unterstuetzung der Deutschen Vereinigung für Sportwissenschaft, 2017, ss.30-31, 査読有

4) 丸山真司, 久我アレキサンデル他 2 名：「体育教師のカリキュラム開発に向かう実践的知識の変容-形成プロセス 小学校教諭 A のライフストーリー・アプローチ」, 日本教科教育学会第 43 回全国大会論集, 2017, pp52-53, 査読無

5) 丸山真司：「『体育は何を教える教科か』を問い直す」, 日本教科教育学会誌, 第 38 巻第 4 号, 日本教科教育学会, 2016, pp.111-116, 査読有

6) 丸山真司：「体育の『学習指導案』再考 - ひと味違う指導案づくりに向けて - 」, たのしい体育・スポーツ, 第 34 巻第 8 号, 創文企画, 2015, pp.8-11, 査読無

7) 丸山真司：「5 人の実践研究とその軌跡に学ぶ」, たのしい体育・スポーツ, 第 34 巻第 1 号, 創文企画, 2015, pp.46-50, 査読無

8) 丸山真司：「体育カリキュラム開発の主体としての教師」, 体育科教育学研究, 第 30 巻第 2 号, 2014, 日本体育科教育学

会, pp.73-80, 査読有

〔学会発表〕(計8件)

- 1) 丸山真司: 体育の授業づくり・教材づくり研究の方法 - 山内基広の実践研究に学ぶ - , スポーツ・フォー・トゥモロープログラム(日本スポーツセンター)「ペルーに対する体育教師の能力開発支援」事業講演, 2018
- 2) Yoshihito Ito, Shinji Maruyama, Kuga Alexander: Examining the Configuration of Olympics-related Teaching Content: Focusing on Olympic Literacy, 10. Deutch-Japanischen Symposium, Institut für Sportwissenschaft der WWU Münster, 2017
- 3) 丸山真司, 久我アレキサンデル他2名: 「体育教師のカリキュラム開発に向かう実践的知識の変容-形成プロセス 小学校教諭Aのライフヒストリー・アプローチ」, 日本教科教育学会第43回全国大会, 2017
- 4) 丸山真司: 体育における「わかる」と「ともに意味を問い直す」, 学校体育研究同志会全国研究大会シンポジウム, 2016
- 5) 丸山真司: 「体育は何を教える教科か」を問い直す、日本教科教育学会第41回全国大会フォーラム, 2015
- 6) 久我アレキサンデル, 丸山真司: ペルーの「体育指針」の検討 - ナショナル・カリキュラムとの関連性に着目して - , 日本スポーツ教育学会第35回記念国際大会, 2015
- 7) Alexander Garay García, Shinji Maruyama, 他2名: La Educación Física Escolar en Japón Ejemplo de un Plan Anual de Primaria Conversatorio: “La Educación Física en Perú y Japón”, カトリカ大学教育学部(ペルー), 2015
- 8) 丸山真司: 教師による体育カリキュラム開発の方法 スクール・ベイスト・カリ

キュラム開発に着目して - , 第65回日本体育学会体育科教育学専門分科会キノートレクチャー, 2014

〔図書〕(計6件)

- 1) 丸山真司: 「単元名の書き方 教科の背後にある文化的な特性と単元の関係」(第1章 2), 「授業づくりからカリキュラムづくりへ」(第3章 3), 学校体育研究同志会編『スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり 指導案の基本とプラン集』, 創文企画, 2018, pp.12-15 及び pp.76-79
- 2) 丸山真司: 「体育科 - 体育の授業づくりのために - 」愛知県立大学教育福祉学部教育発達学科編『小学校教育実践の基礎と展開 - 実践指導力を高める教職ハンドブック - 』, 2017年9月, pp.161-169
- 3) 丸山真司: 「体育で競争をどのように位置づけるか」, 友添秀則・岡出美則編『教養としての体育原理 改訂版』, 大修館書店, 2016, pp.58-63
- 4) 丸山真司: 「これからの教科教育学にはどのような課題があるか」, 日本教科教育学会編, 『今なぜ、教科教育なのか』, 文溪堂, 2015, pp.113-118
- 5) 丸山真司: 『体育のカリキュラム開発方法論』(単著), 創文企画, 2015, 総286頁
- 6) 丸山真司: 「体育カリキュラムの社会的構成をめぐる諸相 - 開発主体の問題に着目して - 」, 岡出美則・友添秀則・松田恵示・近藤智靖編『新版 体育科教育学の現在』, 創文企画, 2015, pp.27-40

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

丸山 真司 (MARUYAMA, Shinji)  
愛知県立大学・教育福祉学部・教授  
研究者番号: 10157414